

「城を歩く会」11月バス研修会「上州・下野の名城を訪ねる」

佐野唐沢山城と太田金山城

～関東7名城・石垣造りの人気山城を歩く～

令和元年11月13日

山岸弘明

本日の主要行程

- 7時45分 JR山手線「上野駅」公園口集合
- 8時00分 出発。東北自動車、北関東高速道
- 10時10分～11時30分 唐沢山城（佐野氏居城）
移動（車中自由弁当）
- 12時20分～14時00分 太田金山城（横瀬、由良氏居城）
移動
- 14時30分～16時00分 足利氏館跡（足利尊氏居館＝現在鏝阿寺）
帰路
- 18時00分ころ 上野着、解散

「城を歩く会」当面のスケジュール（詳細は「会報」を参照ください）

- 1月17日（金曜日） 新年会
- 2月18日（火曜日） 春季研修会
- 3月24日（火曜日） 青べかの町を訪ねる 再トライ

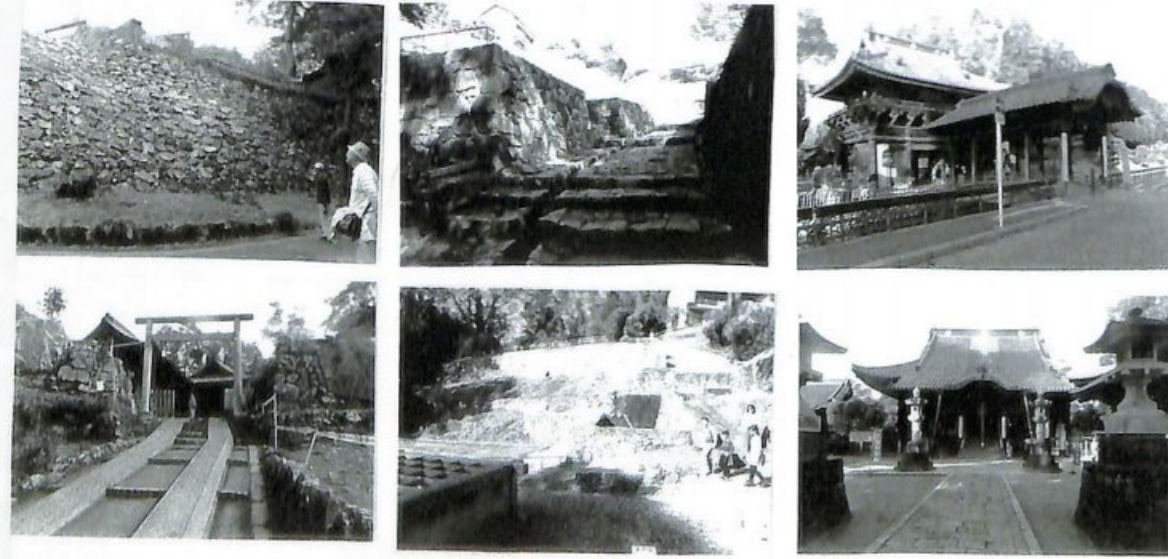
主要参考資料

- 戦国唐沢山城（出居博＝佐野市教育委員会文化財課長、佐野ロータリークラブ発行）
- 千年の古城跡 唐沢山（唐沢山神社発行）
- 史跡金山城跡（太田市教育委員会文化財課発行）

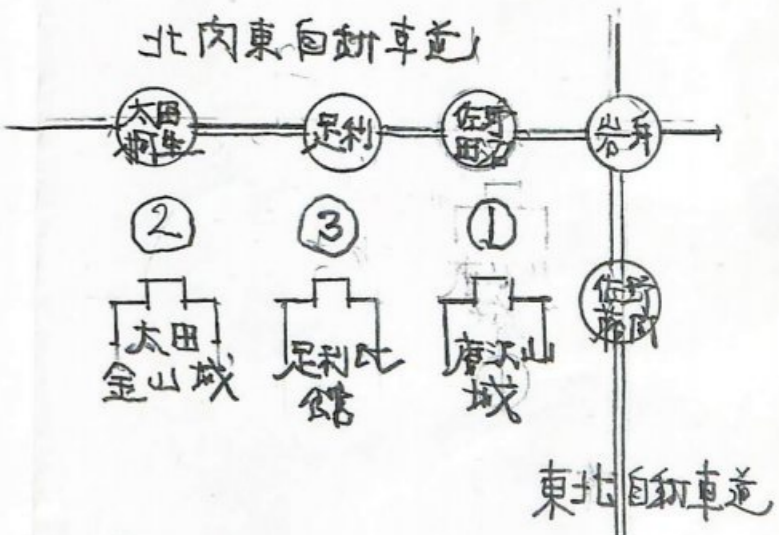
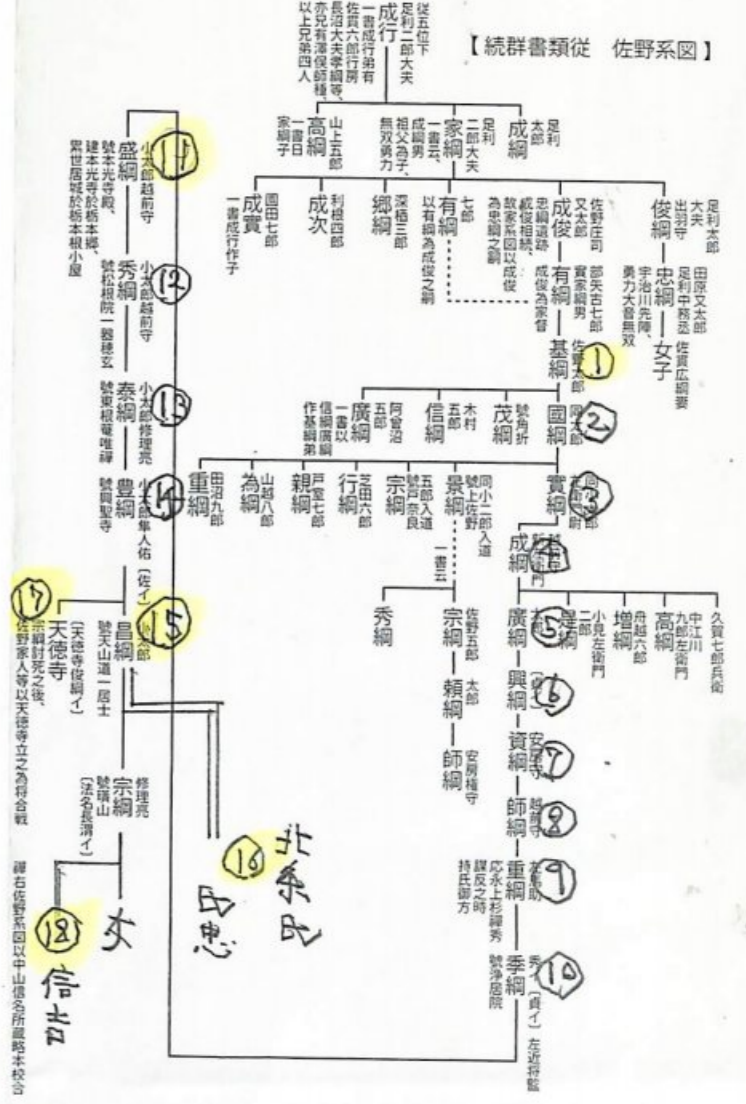
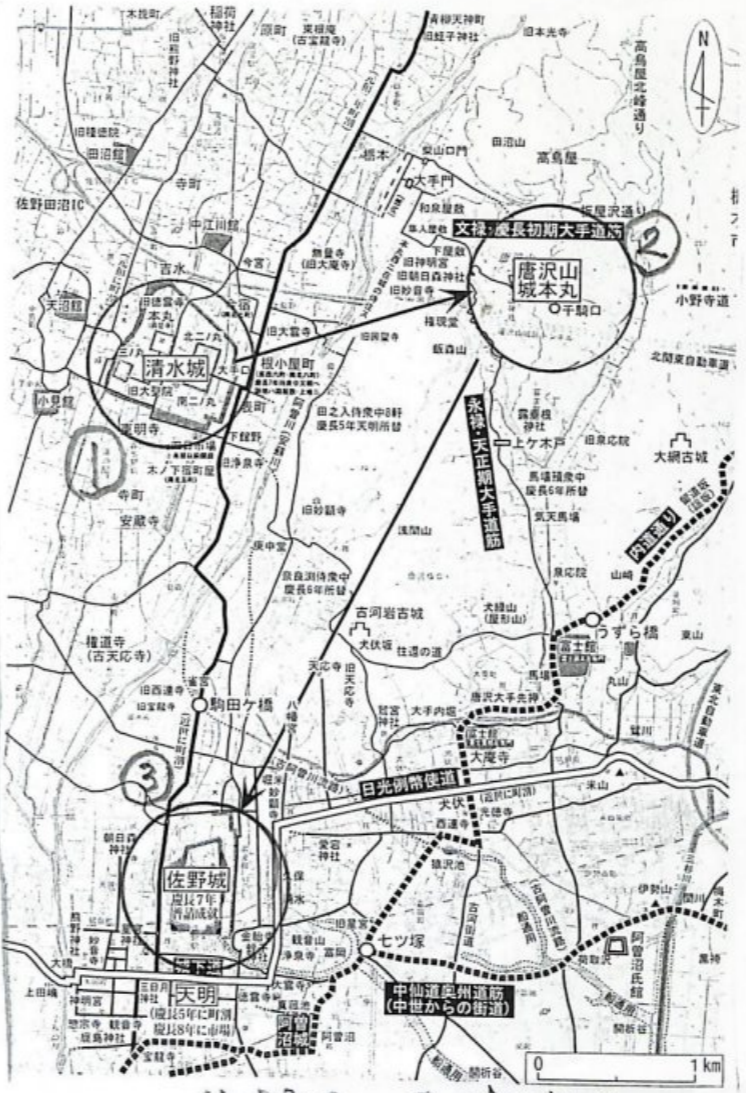
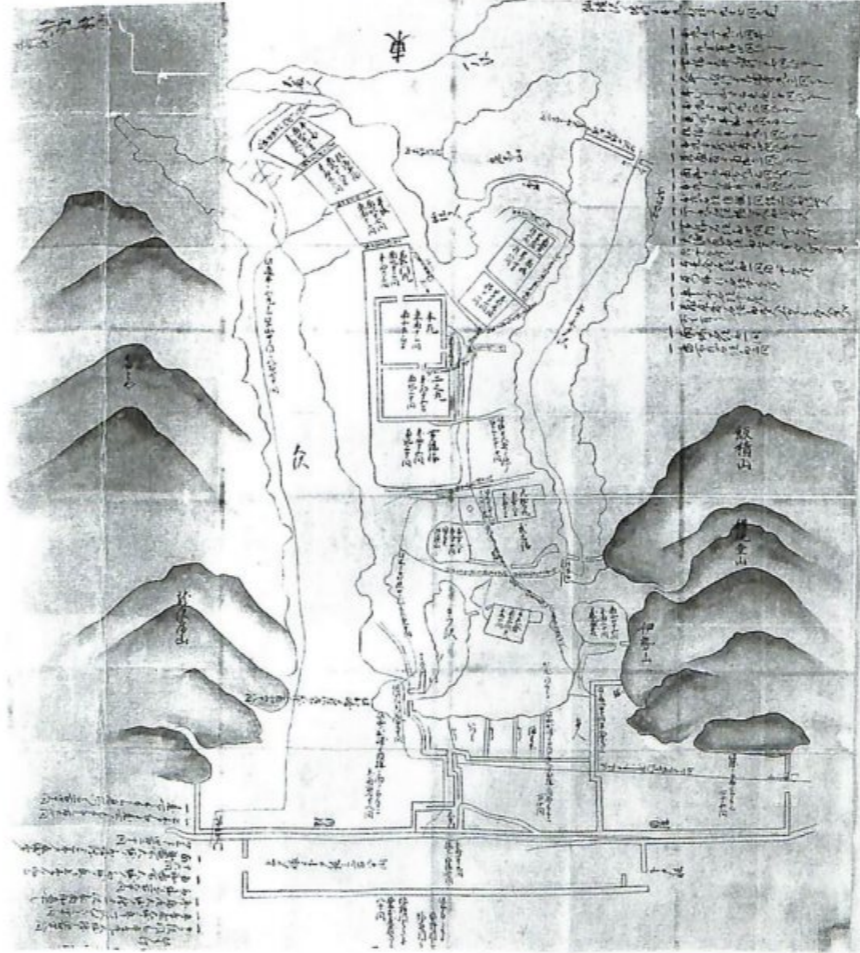
唐沢山城

金山城

足利氏館跡



唐沢山城
古絵図



- 関東7名城
- 唐沢山城（佐野市）
 - 金山城（太田市）
 - 前橋城（前橋市）
 - 忍城（行田市）
 - 川越城（川越市）
 - 宇都宮城（宇都宮市）
 - 佐竹城（常陸太田市）

関東屈指の織豊期石垣造り山城～唐沢山城

1) 豊臣秀吉が家康北方牽制のため送りこんだ富田信吉が大改造した堅城

①平安時代藤原秀郷築城と伝承されるが史実とはいえない
 ②室町中期、佐野氏築城。佐野氏は秀郷流藤原姓足利氏の支流で、足利有綱の子其綱が下野佐野に住して佐野氏を名乗ったことに始まる。11代盛綱が出て基礎を固めたが、永禄年間、北進する北条氏と南下する上杉謙信の間にはさまれて存亡の危機に直面した。佐野氏はもっぱら北条氏に属したため、謙信に本城の唐沢山城を10回も攻められ、時に防戦し、時に降参しながらも家名を繋いだ。15代昌綱が戦死して男子が絶えると北条氏は弟・房綱らの反対を押し切って強引に5男氏忠を養子に送りこんだ。他家に養子を入れて乗っ取るという北条流得意技で、旧家臣の2倍近い210人の家臣団を引き連れ、重臣家族を証人(人質)として小田原に差し出させた。以後佐野氏は完全に北条氏に組み込まれた。天正18年豊臣秀吉「小田原征伐」は氏忠が小田原城に入ったが敗れ、高野山に追放され伊豆で没した。

③一方、佐野を退去した房綱は豊臣秀吉を頼り、秀吉と関東諸大名との仲介役を担う重要な役割を果たしつつ、再起を期すことになる。天正18年(1590)小田原征伐が始まると案内人として先陣に立ち、唐沢山城を直々奪還したあと忍城攻めに参陣している。北条方領主が次々と排斥される中、佐野家を取り潰しを免れた背景には房綱の大きな働きがあった。

*天正18年「浅野長吉あて秀吉朱印状」=松井田城落去について川越、箕輪、前橋も相渡し候、佐野(唐沢山城)儀も天徳寺者(房綱)に相渡し候由申し来たり候

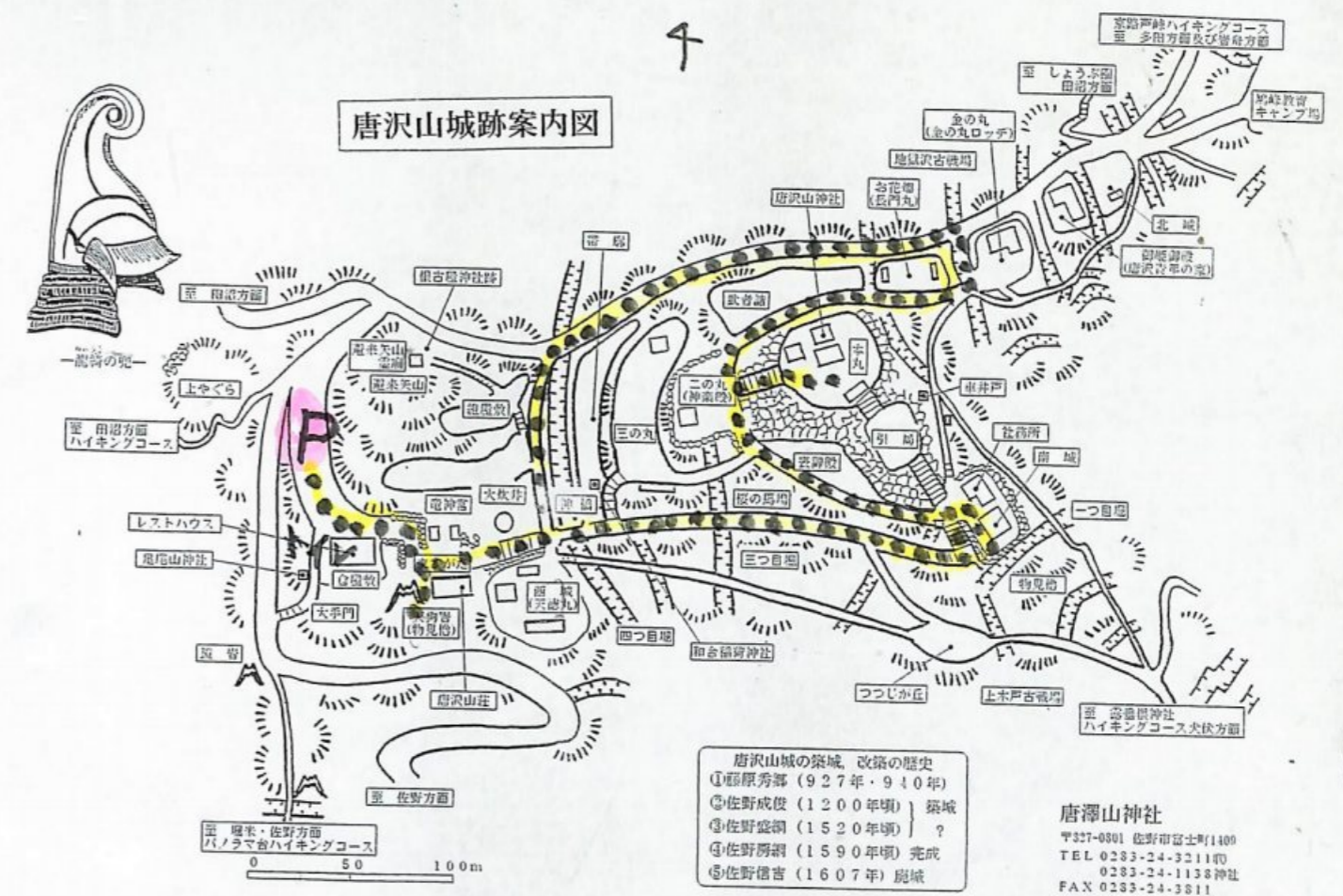
④房綱は秀吉の命で2年間唐沢山城主を勤めた。この間関東最初の織豊期城造りを開始したが、天正20年秀吉の意向にしたがって側近・富田一白2男信吉を養子に迎え、宗綱の娘むこととして名跡を継がせた。房綱はその後も京都伏見にあって秀吉に仕えたとみられ、文禄の役で名護屋に出陣し、慶長6年佐野で没した。

⑤佐野信吉は織田信長全盛期に秀吉旗本として仕え、安土城、大坂城を始めとした関西の織豊期城郭を熟知、城造りにも長けていたようである。房綱の養子として唐沢山城3万9千石を継ぐと、房綱の始めた織豊期石垣城への大改造を引き継いで完成させている。唐沢山城の骨格は旧佐野氏、後北条氏時代に形成されたが、主郭石垣群は主として信吉が改修したものである。

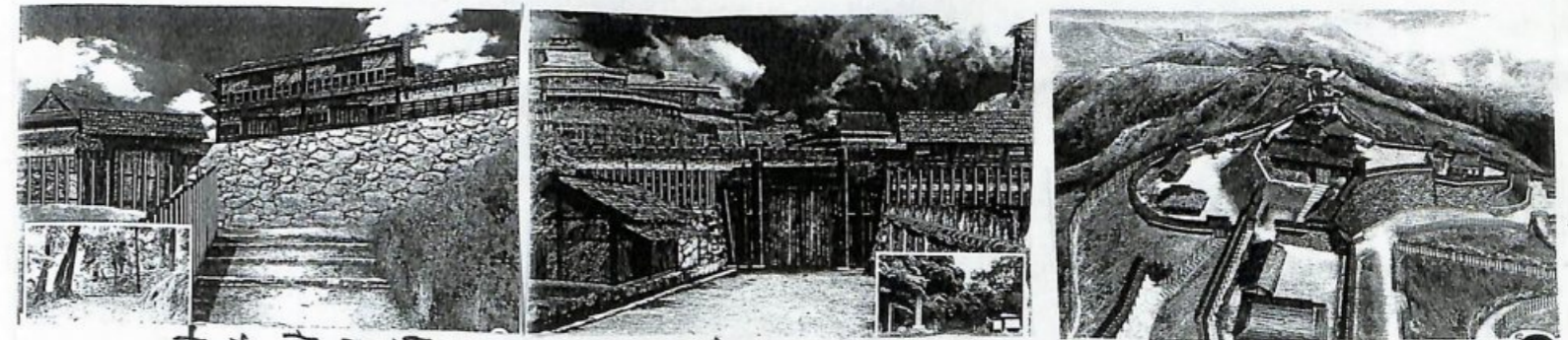
*天正20年「佐野信吉あて叙位口宣案」=天正二十年九月二十二日 宣旨
 豊臣信吉 宣叙従五位下 藏人頭右大弁藤原頼宣奉る
 押紙) 信吉者富田左近将監源知信第二子、佐野天徳寺養子号修理太夫藤原信吉、仕関白豊臣秀吉公、賜羽柴豊臣姓氏

⑥信吉は秀吉の死後、お家存続のため徳川家康に懸命につくした。慶長5年上杉景勝が会津にあって謀反の企てがあるため秀忠の命で封地佐野を守備し、家康が小山に着陣の時、東国諸將と同じく結城秀康にしたがって居城を警固する。同7年家康の仰せにしたがって唐沢山城を廃し春日岡(佐野城)に移り住む。同年第1期江戸城工事では桜田門から弁慶堀普請を担当、信吉は家康の命に従い続けたが、結果的に改易となる。慶長19年大久保長安事件、兄富田信高改易事件に連座、その身は信州松本藩に預けられる。元和8年許されて江戸に戻るも病いを得、同年没。遺児久綱は寛永13年(1636)旗本3000石でお家再興を果たし子孫が明治維新に及んだ。

*慶長19年「廃絶録」=修理太夫こと、内々不義連続せしむところ御糾明あって仰せ付け



まよろご案内コース



本丸高石垣

くさくさ虎口

本丸周回



唐沢山城全図



15代佐野昌綱

らるべしと思召し、御延引候えども、当年在国せしめ、江戸の火事に山上より見候て早馬にて馳せ来る。在国の衆、御意を得ず参府曲事第一なり、修理太夫の城破却、その身は江戸にあらしむべしの由、秀忠様より仰せ付けらる

*史跡「唐沢山城」沿革＝唐沢山神社看板

唐沢山城は佐野市の北、高さ240mの山体をいい、往時の広さ550町歩といわれ、周囲を急崖に囲まれ関東平野を一望に遠く北より日光連山、西に群馬連山、秩父南アルプスとまことに自然の要害である。当社御祭神秀郷公により1000年前の延長年間築城とされ、公はこの城を中心に天慶の乱を鎮定し、大功を立てられ、その功により鎮守府将軍として関東はもとより奥州方面まで威勢を張られた。その後700年多少の変遷はあったが公の子孫佐野家代々の居城として16世紀中ごろに現在の形をととのえたとされている。関東7名城のひとつに数えられ、中世の山城の典型として旧態をよく今に残し、代々の変遷の跡もみられ、近世初期にまで下る整備の跡もうかがわれる。江戸初期、山城禁止令により佐野市の城山公園の地に城換えとなり唐沢山城の歴史が終わるが、明治になり、唐沢山神社が建てられると全山境内となり県立自然公園に指定され、四季折々の風景の中に秀郷公以来の歴史が偲ばれる

*市史跡、名勝「佐野城跡」＝市教育委員会史跡看板

佐野城は別名春日岡城ともいわれ、その地名は延暦元年藤原藤成がこの丘に春日明神を祭ったことに由来すると伝えられています。慶長7年唐澤山城主差の信吉は当時この地にあった惣宗寺(佐野薬師)を移転させるとともに築城と町割りを開始しました。今日みられる佐野の街は当時の佐野城を中心とした町づくりがその原型になっています。佐野氏は慶長12年唐沢山城を廃してこの地へ移りましたが、同19年所領を没収されて改易となり、築城間もなく城は廃城となってしまいました

2) 断崖と深い谷に囲まれた石垣造り要害～古城ムードが楽しめる

- ①縄張りは佐野氏時代の輪郭式山城。全山赤松に覆われ、断崖と深い谷に囲まれた天然の要害といえる。土塁や堀切りを中心とした戦国期由来の個所の一方で、織豊期の石垣普請に代表される最先端技術が交錯する。中世山城から近世へ、古城ムードを満喫できる。
- ②本丸周辺のみごとな織豊期高石垣は自山あら割り石を利用した野づら穴太積み。野趣あふれる荒あらしさ、コーナーの発展途上期、算木組技術にも注目したい。
- ③城遺構は石垣、土塁、堀切り、物見、井戸など。よく整備されている。
- ④唐沢山県立自然公園に立地、城跡一帯は唐沢山神社で藤原秀郷を祀る。

3) 天狗岩、大手の守りと景観～大手門から外郭堀切りへ

- ①大手口のレストハウス前駐車場で降車。いきなりの城内で蔵地跡にあたる。
 - ②枳形虎口＝山頂主郭部の入り口。正面に3の丸、2の丸、本丸と連なる石垣群と建造物(天守は?)が一二三(ひふみ)段にそびえ、押し寄せる敵軍を圧倒した。上杉謙信との戦いはここで敵を食い止め落城を免れたといわれている。石垣、食違い虎口門は冠木門形式か。天狗岩、避来矢山の横矢が厳しい。内部は枳形で武者溜りになっている。
- *食違い虎口看板＝北の避来矢権現山と南の天狗岩に挟まれた虎口(出入り口)で、城郭主要部への大手口にあたる。石垣を食違いにして城門を築き敵軍が直線的に侵入できないような工夫がされている
- ③天狗岩(物見櫓)＝大手虎口右横の天然の奇岩、天狗の鼻のようにみえることから。断崖上絶壁に立地、景観はみごと。好天なら富士山や新宿高層ビル群がみえる。危険なた

め自信ある人だけ。

- ④避来矢山(根古屋神社)＝大手左の小山で組屋敷跡。天狗岩とともに主郭を守る横矢。
 - ⑤唐沢山城大看板＝城の全容と今日の案内コースを確認する。
 - ⑥大炊の井＝築城の時、巖島大明神のお告げで掘ったところ水が吹出したという。
 - ⑦西城、天徳丸＝佐野城復帰をはたした佐野房綱の館跡。
 - ⑧神橋＝「吊り橋で架撤自在のものなり」。引き橋か。
 - ⑨四つ目堀(堀切り)＝主郭と外郭、城台地のやや狭まった地を堀切る。深さ6～7m、北側は土塁、帯曲輪を付属している。
- *大手道看板＝くい違い虎口(出入り口)から続く神社の参道が、かつての大手道と考えられる。この道筋は手前の三つ目堀を過ぎて奥の二つ目堀の直前で左手へ鋭角に折れて急な坂道となり2の丸虎口に至る

4) あら割り石野づら積み、発展途上期の算木組～織豊期石垣を見上げる

- ①三つ目堀周辺。切立つ断崖、天然の要害を確認。
 - ②桜の馬場跡＝城兵の馬術訓練所。どんな山城でも馬を上げる。
 - ③大手道＝二つ目堀手前斜面を登ったが道筋が変わって確認できない。
 - ④南城石垣＝花崗岩地山石を持ち運び大にあら割り、見るからに硬そう。高さ5m。荒々しい野づら積み、コーナーの算木組はまだ整っていない。直下に巾10m一つ目堀と番所丸(物見櫓)を望む。裏側の石積みやコーナー部はみごとだが危険なため省略。
 - ⑤南城(蔵屋敷跡、現在社務所)＝南面高台に立地、絶景ロケーションを楽しむ。社務所は明治27年当時皇太子だった大正天皇の行啓時に休息所とされた。
- *「南城跡」環境省、栃木県看板
- 本丸より南方向にあるところから南城と呼ばれる。(中略)この南城は南北18m、東西36mあり、周囲は石垣をめぐらし東側には堀を設けてあります。天気の良い時にはここから東京の高層ビルが眺められます。
- ⑥帯曲輪＝車井戸を遠望。
 - ⑦大手道から高さ8mの本丸高石垣を見上げる。地山産石の花崗岩、あら割り石野づら積み、穴太積みともいう。佐野房綱の養子として迎えられた富田信種改め佐野信吉が関西の石工集団を呼び寄せて築いた。自然地形を切岸した急斜面に石積みしている。積み方は始め両端の角石を決め、中の築石を繋ぎ、順次上段へ。平ばった面が表面にくるよう、かい石や裏込め石などを組み合わせて巧みに積み上げる。大石をまん中に置いたり、一見無作為にみえる積み方が穴太流で、石工棟梁の頭脳コンピューターが石の声から積み位置を判断するのだという。こうして作られた石垣は完成以来400年をへた現在もびくともしていない。



天狗岩



大炊井



物見櫓
織豊期石垣



本丸高石垣

5) 発掘なく主殿造り本丸御殿や天守は未詳～現在は唐沢山神社

- ①2の丸(西城、追手馬出し、武者詰め、現在神楽殿)＝本丸に次ぐ要めの郭で、石垣に囲まれている。戦時は武者揃え、武者が勢ぞろいして城主が指揮した。
 - ②本丸から2の丸を鍵の手に廻りこんだ石垣を迂回して坂上の本丸へ。
 - ③本丸虎口＝両側石垣に巨大な鏡石。虎口に巨石を立て見せ立てる石のこと。大坂城や名古屋城が知られる。右側は石灰岩で化石も確認できるという。自山に石灰岩はないので外から運び上げたものだろう。
 - ④本丸は城の中心で城主の居館。現在は唐沢山神社で、未発掘のため天守があったかどうかも含めて建物やその配置などは不明である。
- *唐沢山神社＝当神社は御祭神藤原秀郷公の流れをくむ佐野氏により戦国時代初期に築城された本丸跡に建てられています。公は「むかで退治」の伝説や「天慶の乱」の鎮定などから武勇に優れていたことが知られています。また、この欄の鎮定の功により鎮守府将軍に任じられました。その後700年のあいだ多少の変遷はありましたが、(土)時代初期に廃城となりました。明治16年佐野氏の一族旧臣などが公の遺徳を偲び唐沢山神社を建てました。
- *「本丸跡」看板＝藤原秀郷公が祀っており、苔むす石垣は当時のままである
「引き局跡」看板＝奥女中の詰め所跡
- ⑤本丸の東側には長門丸、堀切りを挟んで金の丸と続き、さらに北東方向の尾根伝い枝状にのびている。残された石垣技法などから築造年代は古く、これらは北条氏時代の遺構と考えられている。
 - ⑥2の丸西側のさらに一段低くなった半月状の削平地は城内最大の広さを持つ3の丸で、ここには「使者の間」と呼ばれた接待施設や厩舎などがあった。当初は大手道が3の丸から2の丸、本丸と続いたと考えられていたが現在では否定されている。



2の丸から3の丸への上り



本丸大手



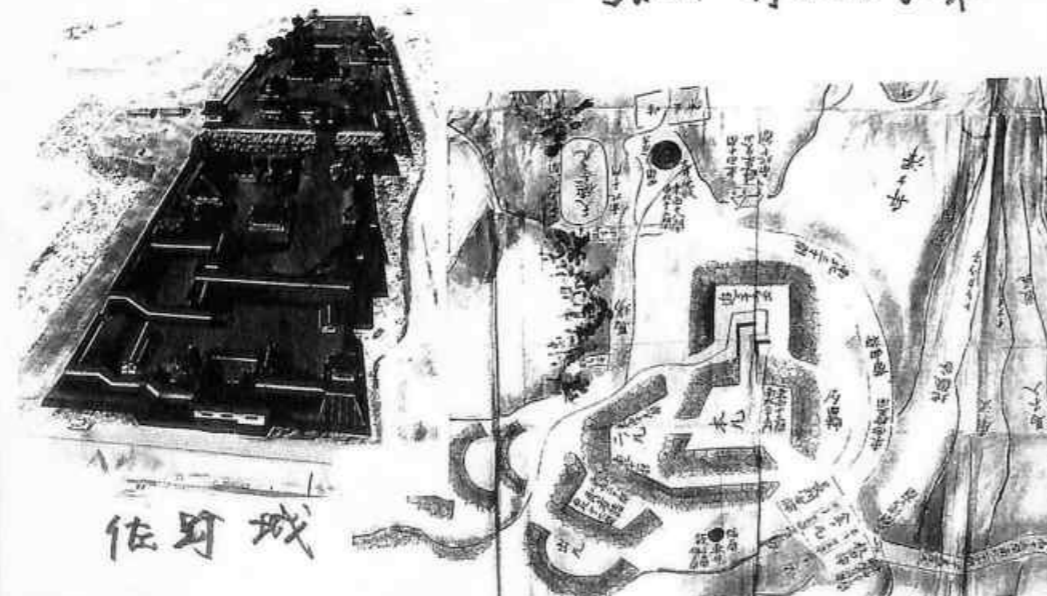
唐沢山神社古宇集



コーナー部



唐沢山城の概観



佐野城

唐沢山城首尾図

下野の傑作石垣山城～太田金山城

1) 上杉謙信や武田、北条氏を撃退した堅城

- ①太田金山城は別名を新田金山城といい、本丸跡に新田義貞を祀る新田神社がある。平安時代源家嫡流の義家が当地に3男義国を配したとされ、その子義重が新田氏を名乗り、南北朝時代に新田義貞が出て鎌倉幕府を倒した。当時は平地の館城だが城跡は確認されていない。
- ②金山城は太田市街の北側金山一帯に立地する山城で標高235m、さほど高くないが平野地の独立丘陵で大小の峰が重なった天然の要害となっている。文明元年(1469)新田氏の後裔岩松家純が築城、享禄元年(1528)岩松氏の重臣だった由良(横瀬)氏が実権を握った「下剋上」で城主となった。金山城は堅城で上杉謙信の再三の攻撃にもひるまず、武田氏や北条氏にも攻められたがそのたびに撃退した。成繁の時相模の後北条氏に与し、国衆として全盛期を迎えたが、その子国繁が北条氏の佐竹氏攻撃のため金山城の使用を認めたことから一族内で抗争がおこった。反抗はまもなく鎮圧されたが、以後北条氏が金山城に在番した。天正18年の豊臣秀吉「小田原征伐」では戦うことなく開城、豊臣秀吉により廃城とされた。
- ③城は山頂の実城(以降、本資料では本丸とする)を中心に4方のやせ尾根を開いた西城、北城、八王子山砦などからなる。発掘調査結果などをもとに大手虎口や石敷きの城道、土塁石垣などが復元整備された。眼下に太田市内や関東平野が一望できる。

2) 西城モータープールから本丸をめざす

- ①バスは曲折の続く山道を金山城めざす。
- ②金山モータープールで降車。ここからは平坦、尾根道の本丸をめざす。
*金山城は本丸を中心に四方のやせ尾根に支城や砦を築く縄張りになっている。太田口は大手口で、ほかに北城(坂中城)を守りの柱とする長手口などがある。
- ③見付出丸＝見付は番兵の見張り所、最先端の砦で周囲が急崖になっている。
- ④岩道と平道(観光用の道)に分かれる。元気組は岩道を進む。すぐに合流。
- ⑤西矢倉台西堀切り＝4つの堀切りの最初。堀切りは山や尾根を掘り切ることで堀底道、ここでは小石を敷いて歩きやすくしている。
- ⑥栈橋＝山のがけ地に作った栈橋。現在は危険なため交通止めになっている。



金山城 全景

3の丸虎口



物見下虎口



3) 土塁石垣と物見台——西矢倉台曲輪と馬場曲輪

- ①西矢倉台下掘切り=2つめの掘切り
- ②この掘切りと次の掘切りの間の郭が西矢倉台曲輪でやや平坦な尾根になっている。
- ③正面に矢倉(櫓)台がある。弓矢を納める武器庫。近世では城の象徴としての天守に発展する。当時の矢倉は井楼型で虎口や城壁に上げ、敵情を視察し、敵を迎え撃って射撃の拠点となった。
- ④堀底道から矢倉台を見上げる。郭肩部から石積みされた壇状土塁が掘切りに沿って伸びている。かつてその上に井楼矢倉があがった。
- ⑤3つめの掘切りが物見台下掘切りで4つめ大堀切りとの間全長200mほどを馬場曲輪と総称する。馬場跡と想定されたが発掘調査でも発見されず細長い郭であったことから後世の命名と考えられる。下段を馬場下、上段を物見台、馬場と呼んでいる。
- ⑥物見台下掘切り=岩盤を人工的に削って造った掘切り。荒々しさが魅力。削り取られた石材は城内の石垣に使われた。
- ⑦土橋=掘切りにかかる石垣の土橋。直進できないようクランクになっている。
- ⑧物見台下虎口=中央通路の両側に土塁石垣、通路に門があったと推定されている。石垣に横長の多聞矢倉を回せば渡り櫓門だが市もそこまでは踏み込んでいない。
- ⑨馬場下通路=山すそに通路を設けることで尾根上からの連続横矢を形成する。石敷きと柵列整備、さらに登ると馬場曲輪の尾根上に出る。
- ⑩物見台=馬場曲輪の西端、掘切り上に立地。発掘調査で長さ3.7m、幅1.2m、高さ0.4mの石築地を検出、この上に井楼矢倉を築いたと考えられる。城内で一番見晴らしのよい場所で、好天なら赤城、榛名、妙義の上毛三山、浅間山や関東山地を望む。

4) 金山城最大の守り大堀切りと月の池、日の池

- ①敵堀大堀切り=主郭3の丸と馬場郭を隔てる金山城最大の掘切り。大手虎口に接続する最大防御拠点。発掘調査の結果、堀底から高さ1.8mの畝状障害壁が発見された。
- ②月の池=大堀切りのほぼ真下、本丸虎口脇に池がある。はじめただの水たまりと思われたが掘り下げて石垣と石敷き平地を検出、直径7mだが2.5mと深い。当初は大堀切りの長軸線上に構築し、後代現在地に改修されている。
- ③日の池=この先2の丸にはさらに大きな日の池がある。水の少ない冬季でも水が枯れることはない。平均直径およそ17mのやや楕円形で、石組みとその回りに石敷き平坦面とさらに石垣が周囲を囲む二段構造になっている。またテラス面の2か所に石組み井戸跡と石階段、掘切堀底道が接続している。
- ④大規模な池が山頂近くにあることはめずらしく、戦勝祈願や雨乞いなどが考えられる。

5) 三段の郭が大手道を見下ろす——大手虎口と3の丸

- ①月の池から金山城最大の見どころ大手虎口に出る。主郭部3の丸の大手門で、虎口は3の丸の谷地形の底に作られている。通路の両側は石垣で、左側は下段、上段、3の丸に、右側は下段、上段、南曲輪の3段が大手通路を見下ろす嚴重な構えとなっている。
*発掘調査で2時期の瓦石門礎石が確認されたが形式などの詳細は未詳
- ②両側の石垣に圧倒されながら40mほど直進すると大手通路東端「土塁石垣」に突き当たる。迂回した左右両端に虎口があるが最終期は右側が閉鎖されていた。
*土塁石垣は発掘調査チームが土造り土塁と区別するために使用した造語で石造り土塁
*通路敷石、排水溝、階段
- ③石積みは地産わり石、野づら積み。うらごめ石とかい石がみられる。
きれいに出来すぎとの評価もある=石垣の下部には当時のままの部分もある。復元にあたり積み直されたので必ずしも当時どおりとはいえない。
- ④石垣には掘切りや郭造成で採掘された「金山石」と呼ばれた凝灰岩が使われている。金山石は「せつり」と呼ばれる石のわれめがあり、人力で運べる石が容易に採取ができた。
- ⑤金山城石垣の特徴=石材は総じて小さい。表面積の大きな面を表に向ける。水平におく。横目地を通す。高さは2m以内、それ以上の場合には犬走りをつけてひな壇とする。勾配ソリはなくほぼ垂直に積み上げている
*コーナー部の技術は未確立、やや大きめのわり石を使ったが算木組とはいえない
*発掘調査で石垣がなんども積みなおされたことが確認されている

6) 新田義貞を祀る新田神社——本丸跡

- ①御台所曲輪北側の大けやき
- ②新田神社=明治6年、岩松氏の先祖、新田義貞を祀る。
- ③本丸(実城)跡=通称天守曲輪。天守形式の建物があったといわれている。
金山城の最頂部で城主居住区だが発掘未調査のため建造物などの詳細は未詳。
- ④本丸をめぐる御台所曲輪と南曲輪の南斜面に帯曲輪が3段に残り、最下段の法面は石垣で南虎口がある。また正面西側の石垣は新田神社建造のため取り壊され参道の石垣などに利用された。本丸の急崖、石垣にも注目したい。
- ⑤本丸から四方に伸びる尾根に支城、砦群。堀切りやひな段型の郭を構築している。
- ⑥神社裏側に1段めの帯郭が廻る、裏馬場に石垣が現存している。角石は城わり(破城)のとき取りはずされたとされる。
- ⑦帰路は整備用車道を楽しく駐車場に戻る。バスは最後の見学地・足利氏館跡をめざす。
保科講師にバトンタッチ。 以上

ご案内コース

ウグイスの美しい声を聞きながらの散策は春から秋にかけては、つらやまの山、川、谷をめぐりながら楽しむことができます。

大堀切り 実城の南側にあり、金山城の中で一番大きな堀切りです。

月の池 城の中心部への入口部にあり、秋になると水の色が美しく見えます。

日の池 大堀切りの延長線上にあり、水が枯れることはありません。

本丸跡 天守形式の建物があったといわれています。

新田神社 明治6年に新田義貞を祀るために建てられました。

大手虎口 実城へ向かうための通路の入り口で、石垣が現存しています。

石垣 金山石を使った石垣が現存しています。

石組み 石組みの井戸跡や石階段などが現存しています。

石敷き 石敷きの平地や石敷きの通路などが現存しています。

石組み井戸跡 石組みの井戸跡が現存しています。

石階段 石階段が現存しています。

石組み 石組みの井戸跡や石階段などが現存しています。

石敷き 石敷きの平地や石敷きの通路などが現存しています。

石組み井戸跡 石組みの井戸跡が現存しています。

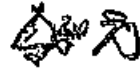
石階段 石階段が現存しています。

所要時間 総合案内館→物見台まで約10分→大手虎口まで約15分→新田神社(実城)まで約20分

新田義貞公と新田神社

新田氏八代目義貞は、群馬が誇る武将の一人。「いざ鎌倉」の号令で倒幕の挙兵をしたことはあまりにも有名です。進軍してからわずか15日後、鎌倉幕府滅亡を果たします。しかし、その後朝廷が南北に分裂し、南朝方の義貞は北朝方の足利氏らとの激戦に敗れ最期を迎えました。義貞を祀るため、明治8(1875)年には金山城本丸跡に新田神社が建てられました。

新田神社 真田を祀る神社。境内には樹齢600年といわれるスサキナギがあります。



2019.11.13 (保科)

<メモ> 武士の発生と荘園

はじめに

◎今日は太田金山城、唐沢山城、足利氏館といった上野・下野地方の名城を訪ねる。ここで、足利氏館も城の範疇に入っているが、同館は「館城（やかたじろ）」といわれ、城の範疇に入れられており、日本城郭協会が選考した「日本の100名城」の中にも入っている。

◎こうした名城群は、新田氏や足利氏、藤原秀郷ら、世の動向を左右した剛勇の武士たちの流れによって建てられたと伝えられるが、名城自体が優れた武士を生み出したのか、逆に、優れた武士たちが強靱な名城を生み出したのか。いずれにせよ、プロ専門職たちによって建設されたものであるに違いない。

◎余談はさておき、こうした「武士たち」がいつごろ、どのような事情で生まれ、以後700年近くもの長い期間、武家政権がこの国の政治を左右するに至るきっかけになったのかを概観してみたい。どうも、武士の発生と発展は、「荘園」をはじめ土地の仕組みとのかかわりが、かなり深いようだ。

◎『大辞林』の「荘園」の欄に、

「荘園とは、奈良時代末期以降、貴族や寺社が諸国に私的に領有した土地をいう。大規模な開墾と地方豪族・農民からの寄進によって平安中期に飛躍的に増大し、また、不輸・不入の特権を得て、貴族・寺社の経済的基盤となった。鎌倉・室町時代を通じて武士勢力の侵略を受け、また、商業経済が発達するに及んで次第に衰え、太閤検地によって、制度的にも消滅した」とある。

◎一方、「武士」とは、「武芸を身につけ、軍事に携わった者。平安中期以降に台頭し、江戸時代は四民の最上の階級とされた。さむらい。もののみ」と掲載されている。

1. 荘園ができるまで

◎ヤマト政権の時代、すなわち、全国で盛んに大型の古墳が造られていたころまでは、地方ごとに豪族（地方の支配者）がいて、地方ごとの決まりで土地や人が支配されていた。

◎「大化の改新」（645年）によって、土地と人はすべて朝廷（国・天皇）のものとし、農民に「口分田」（くぶんでん）を貸し与える法律ができた。

「班田収授の法」。1代限り。男性は20アール、女性はその3分の2の農地。当人が死亡すると農地は国に返さなければならなかった。

◎加えて、6年ごとに戸籍が作られ、口分田でとれたコメの3%を「税」として朝廷に納める（特産物も）、さらに公的な労役に年間60日間、駆り出され、不要の「コメもみ」を高利で貸し与えられる。特に関東からは「防人」として九州沿岸の警護に徴用されるなど、口分田を耕作する農民が減少した。

◎こうした厳しさから、口分田を捨てて逃げてしまう農民が出てきた。朝廷は困ったあげく、原野を新しく開墾して作った田は、親・子・孫の3代までは使ってよいという「三世一身の法」を出した。しかし、3代が経ると返さなければならぬ。やはり、人気が出ない。

◎そこで、「墾田永年私財の法」を出す。743年。大化の改新から100年しか経っていない。新しく耕した土地は、すべて当人の所有になるというのだ。張り切ったのが、豊富な資金を有する京や奈良の大寺院や神社、貴族たちは、口分田から逃げ出した人々を雇い、せっせと原野を耕作していった。

◎こうして広げた農地や、農村を含む地域のことを「荘園」と呼んだ。「私有地を認める法律」によって、荘園は、近畿地方から全国に広がっていった。

◎当初は、身分によって決められていた荘園の広さを、だれでも耕せば、その人のものになることに改めたことから、中央の貴族たちだけでなく、地方の有力者たちも積極的に新しい農地を広げていった。平安時代の中ごろのことである。

◎さらに、藤原氏などの有力な貴族たちが政治を行うようになると、自分たちに都合のよい決まりを作って税を払わなくても済む方法を考え出した。「不輸の権」である。

2. 不輸・不入の権

◎「不輸の権」とは、もともと貴族や大きな寺院・神社に与えられていた権利だが、これを地方の豪族まで採用されるようにしてしまったのだ。

◎その方法は、豪族たちが耕作した農地を中央の貴族に寄進して、豪族たち

は「農地の管理人」に甘んじようというのだ。「管理人」ではあるが、事実上の「所有者」である。「名目上の所有者」には、礼金だけ払えばいい。

こうして、豪族たちの土地が荘園になっていく。こうした荘園を「寄進地系荘園」と呼んだ。なお、自ら耕して作った荘園は「自墾地系荘園」といった。

◎もう一つ、貴族の荘園にすると「不入の権利」が得られた。平安時代、地方で最も上位者は、中央から派遣された「国司」である。貴族階級、中には皇族もいた。彼らに与えられていた権利を「不入の権」といい、国衙の役人たちが自らの門内に入出入りさせない権利のことであった。

3. 武士の始まり

◎このように私有地が増えてくると、境界争いや役人たちとのトラブルが多くなり、「自分たちの土地は自分たちで守る」という有力な農民たちがでてきた。これが、「武士の始まり」である。彼らは、より強力な人と主従関係を結んで武士団を作っていく。中には武士の専門家になって荘園主である貴族に仕えるものもでてきた。「武士」=「さむらい」=「さぶらう者」。

◎武士団の中心には強力なリーダーが必要である。そこで頼られたのが、地方に残った平氏や源氏の一族であった。平安時代の終わり、「保元の乱」をはじめ京の都で大きな戦があった。加えて平氏は一族が貴族化したことから滅び、源氏が鎌倉に政権をつくって全国支配を目指した(1192年)。

4. 御家人と守護・地頭

◎鎌倉幕府初代将軍の源頼朝は、自分と主従関係を結んだ武士を「御家人」とよび、彼らを守る守護と地頭に任命して全国に配置しようとした。

ひと言でいえば、守護とは、国司と同じくらいの力を持つ警護の長官(各国1名)。地頭は各荘園ごとに配置された警察官プラス徴税係といったところか。幕府の建てられた当初は、幕府の力が及んだのは平家が有していた荘園や、鎌倉方に逆らった武士の荘園に限られていた。それほど、特に西日本では源氏への抵抗は強かった。

◎ところが、「承久の乱」(1221年)が起こり、幕府に対し転覆をはかった朝廷側が敗れると、朝廷は全国の荘園に地頭を置くことを認める、こうして、承久の乱以後、新しく配置された地頭を新補地頭という。

◎守護は、東国出身の有力武士が任命され、国内の御家人を、京都や鎌倉の警備につかせることや、反逆者や殺人者の逮捕、戦の時の武士たちの指揮などが任務。守護としての収入はなく、多くは地頭を兼務して、その収入を得る。

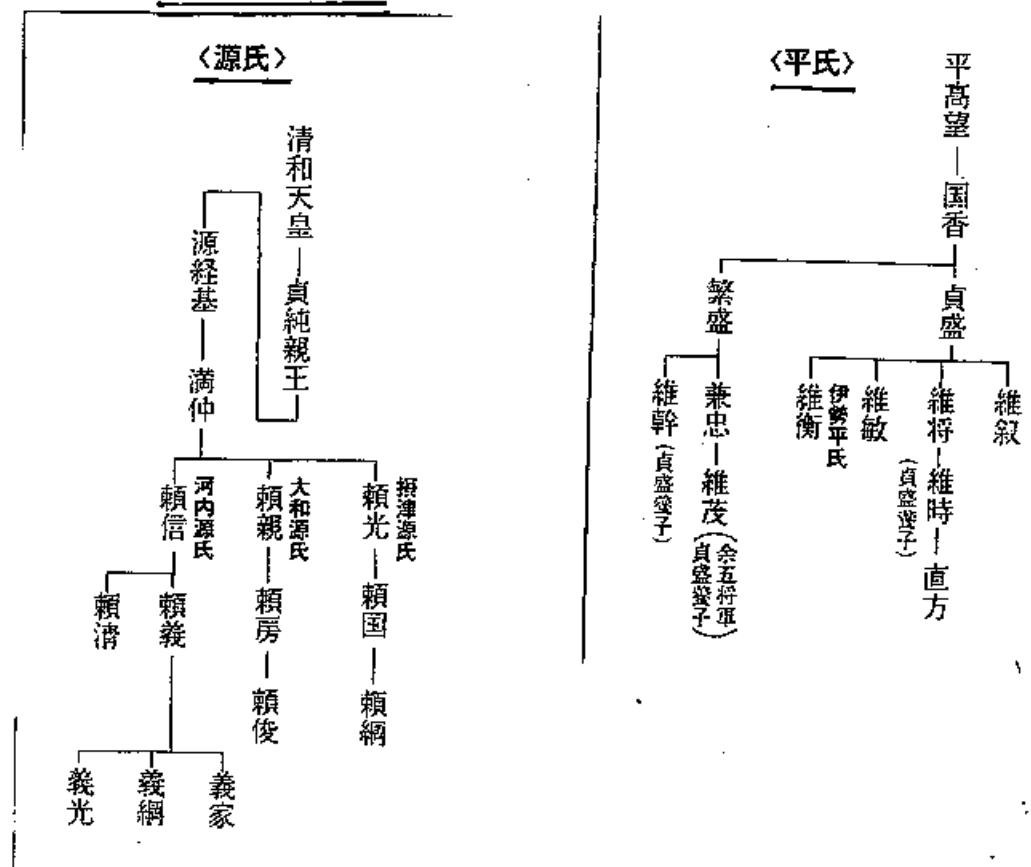
◎一方、地頭は、年貢の取り立て、荘園や公領の管理、先述の通り警察業務などを担ったが、報酬は11町ごとに1町分の年貢、1反ごと5升のコメなど。

◎地頭の中には、荘園主の土地を勝手に自分のものにしたり、税を横取りしたりするものも現れた。困った荘園主は、荘園を真っ二つに分けて地頭に提供した(「下地中分」したじちゅうぶん。荘園制崩壊の一因とも)。こうして御家人たちは、地頭や守護という立場を利用して、自分の土地を広げていった。

◎関東では、もともと武士=荘官(荘園の管理人)というところが多かったのので、荘園主との争いは少なかったのだが、関西以西は争いが多かったとされる。鎌倉幕府は武士による政権だが、武士の権利を守る組織という側面もあった。

◎このようなあらずじで、武家が生まれたのであるが、以降、明治維新に至るまで700年近くにわたり、この国の政治を武家政権が担ってきた。その間の詳細な経緯や功罪については、多様な議論がしきりに展開されているところだ。

源氏・平氏略系図



足利氏館（鏝阿寺）

足利氏館の意義

下野の国、野州ともいう。館は、足尾山地から流れ出る渡良瀬川が形成した自然堤防の上、東西北の三方は山に囲まれ、南は関東平野に広がる微高地の中央部にある。

12世紀末ごろ、「足利荘」の中心部に造営された足利氏館は、後に足利氏の氏寺である鏝阿寺となり、多くの建造物とともに現在まで残されている。

この方形館の約2町四方という規模は、在地領主クラスでは最大級で、足利氏の勢力と財力の大きさを表すものだ。中世の平城の様子を良好に伝える史跡として貴重な城館で、「日本の100名城」（日本城郭協会選）に選ばれている。

足利氏館の年代

当館は、典型的な平安時代末期における在地領主の方形館とされてきたが、土塁や堀の遺構がいつまでさかのぼるかに関しては、発掘調査が実施されておらず、不明といわざるを得ない。しかし、主要部分は足利義兼の時代に築かれたものであると推定される。

ちなみに康治元年（1142）、「鳥羽安楽寿院領」（鳥羽上皇の御願寺）の「足利荘」立荘が認められる。すなわち、開発領主の源義国（後出の義兼の祖父）が開発地を中央権門に寄進し、自らは荘官に甘んじ、自己の地位保全を確保することにより、国司からの「收税」を免れたのである。

居館から氏寺へ

足利氏館は、源姓足利氏2代目の足利義兼が12世紀末ごろに築造した館である。義兼は源頼朝の、遠戚ながら従兄弟に当たり、かつ義兼の正妻は北条時政の娘・時子であったことから（頼朝の正妻・政子と政子は異母姉妹）、頼朝と深い関係にもあり、鎌倉幕府の創設を助けた。

建久7年（1196）、義兼は館の一角に持仏堂を設け、これがのちに氏寺の鏝阿寺へと発展する。天福2年（1234）、義兼の息子・3代目義氏のころか。

2代目兼義は、晩年高野山に入り、出家して、この地に大日堂（現・本堂）、鐘楼などを建立して、源家相伝の大日如来を安置する一方、一門子弟の育英の

ための「足利学校」を館に隣接して興した。

義兼（僧名・法華坊鏝阿）は鎌倉時代、東大寺・重源上人、歌人の西行法師とともに総本山の高野山を復興した3人の功労者の一人といわれ、高野山で尊崇されている。義兼7世の孫が足利尊氏。1336年、京都室町に幕府を開いた。

足利氏館の構造

館は、四囲を堀と土塁に囲まれた方形館である。

堀を含めた規模は、東辺約180メートル、西辺207メートル、南辺214メートル、北辺220メートル。土塁は下幅8～10メートル、上幅2～2.5メートル、高さ2～3メートル、堀の幅4～5メートルあり、堀の外側は、土揚げ場として、かつて幅0.6メートルほどの低い土塁があった。

四辺の中央部を出入り口として土塁を設けず、それぞれに橋と門を置く。南は屋根付きの太鼓橋（県指定・江戸時代）と楼門（県指定・室町時代）が、東西は土橋と四脚門（県指定・鎌倉時代）が、北辺は土橋と薬医門（市指定・江戸時代）である。

鏝阿寺の遺構

鏝阿寺内部に残る建造物は、

本堂（国宝・鎌倉時代。義兼の建立。90間100坪本瓦葺き禅宗式に和様を加味した鎌倉期の代表的建築）、

鐘楼（重文・鎌倉時代。本瓦葺き、入母屋造り袴腰付き。鎌倉期の飾り気のない禅宗様式は、関東以北では珍しい）

楼門（県指定・室町時代。13代将軍義輝の再建。仁王像の大きさ）

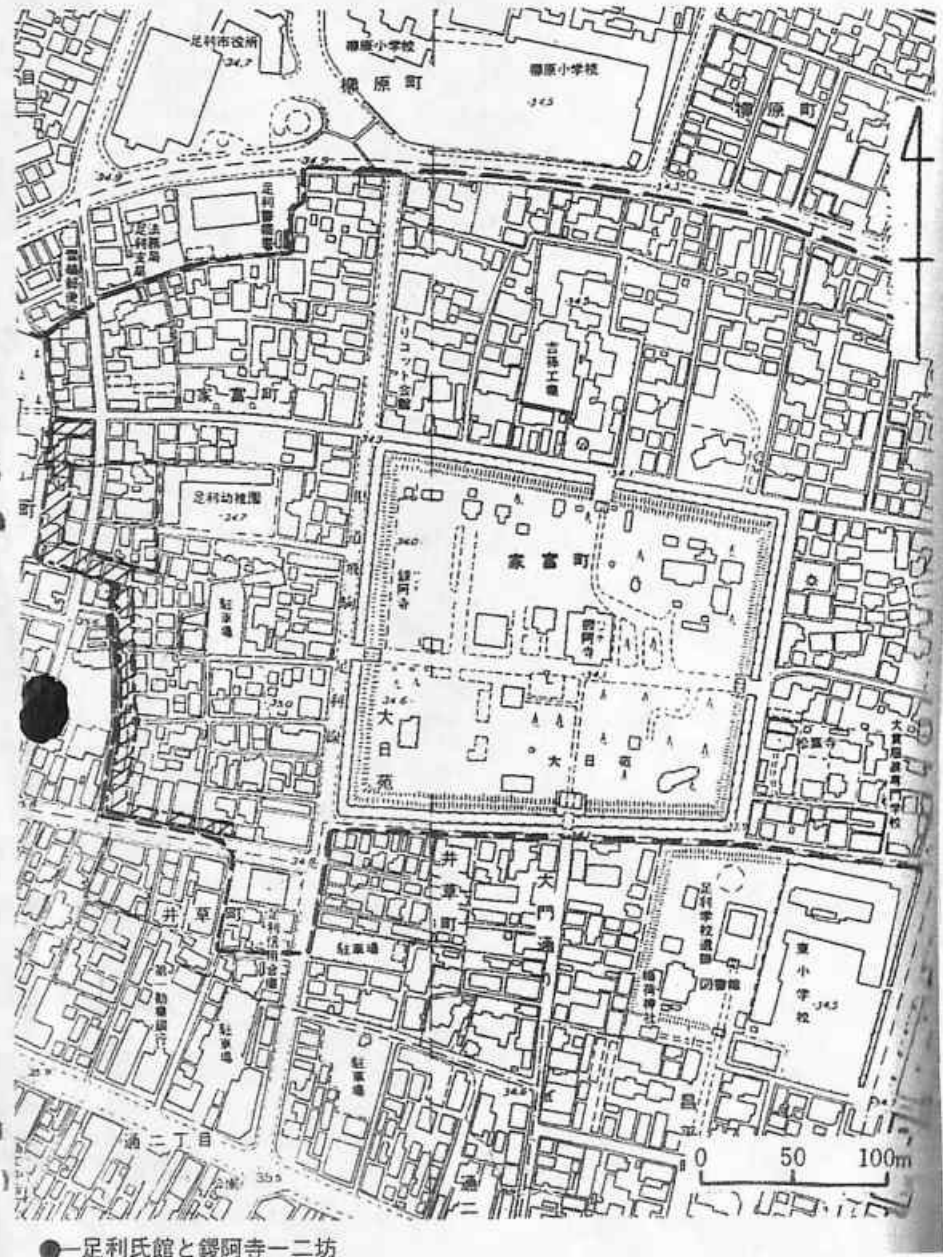
経堂（重文・室町時代。これだけ大きな経堂は稀だ）

多宝塔（県指定・江戸時代。徳川5代将軍・綱吉の生母・桂昌院の再建。重層、銅板葺き、頂上に九輪と水煙がのっている。関東では珍しい建物）

なお、方形館の東西や北側には十二坊が配置され、輪番で寺院の運営を行ったといわれる。



●館をめぐる水堀



●一足利氏館と饅阿寺一二坊



景和定 大日如来坐像(鎌倉時代)



●鐘楼



●経堂



●多宝塔



●本堂(国宝)



●楼門(山門)

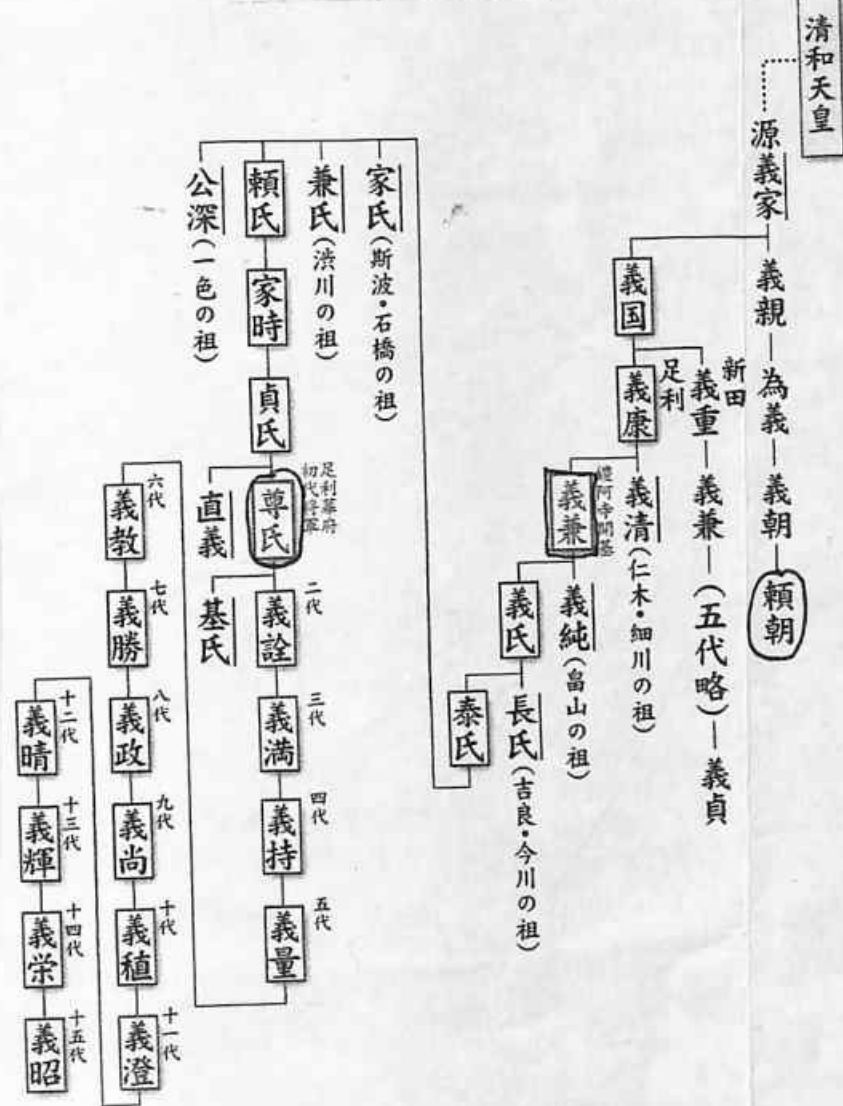


●東門および西門



●宝庫(校倉)

足利氏略系図



●一上空からみた足利氏館(提供:足利市教育委員会)